

先月よりさらに投稿数が増え、言葉というものを信じ、詩のかたちにしていこうという書き手の方がたくさんいるということに励まされる思いです。

祖母がいない庭で
金木犀は咲く
夜の濃度を吸い上げながら
さいう（愛知県）

「祖母がいない庭」で咲く金木犀。あの特徴のある香りが今までよりいっそう濃く感じられたのでしょうか。死者は姿かたちが見えなくなっても、残された人の心のなかに居続ける。ともすると生きていたときよりもずっと強く。近しい誰かが亡くなったときを境に自分に降り積もってゆく時間（思い）というものが描かれているように思いました。

何のため生きているのか 卓上に
捨てれる容器ばかりを並べ
松下 誠一（東京都）

カップ麺や買ってきた弁当の容器。自分は消費する側だが、「捨てれる容器」に消費される自分を見たのかもしれない。なんとも思わずに食事を済ませるときもあるのだろうが、ふと兆したのだ、切実に。「何のため生きているのか」と。この問いはおそらく誰も覚えがあり、抱えているのは自分だけではないと教えられる。答えはでないまま、日常は繰り返される。言葉に留めること、また、それを受け止めることが生きる希望につながってゆくと信じたい。

見送りに振る手を下ろし
客人の背中は闇に
つぶんと沈む
さいう（愛知県）

先ほどまで同じ時間を共有していた「客人」は「見送りに振る手を下ろし」たとき、もう自分には手の届かない世界の外にいる。「つぶん」という絶妙なオノマトペによって、語り手の感じた遠さ、さみしさが胸に響いてきます。

声変わりした君が呼ぶ
わたしの名
かすかにひかり出す
わたしの名
さいう（愛知県）

「君」は「声変わり」して間もないのでしょう。時間は止まることなく、これから声だけではなく「君」の「わたし」のいろんなものを変えてゆく。「かすかにひかり出す」ほかならぬ今ここにいる「わたしの名」。“今”という瞬間の輝きが、詩のなかに閉じ込められています。

シーツのしわは海のしわに似てる
とほんのり笑うきみの命日

藤ほたる（神奈川県）

誰かを失くしても「ほんのり笑う」ことのできる日常が続けられるのは、「シーツ」と「海」といった遠いものを結びつけることのできる想像力（それは時間も場所も自由に越えることができます）が人間には備わっているからかもしれません。

だんだんと空は重たくなっていて
支えるためのビルも増えていく

猫谷圭希（広島県）

本来、重力に逆らえないのは地上に建つビルのほう。この反転にまず新鮮さを感じ、そのあと破綻はもうすぐそこまできているのではないだろうかという不穏さが胸に訪れました。

おはようもおはうよも同じ挨拶と
みなせる人の目の柔らかさ

猫谷圭希（広島県）

誤字を「人の目の柔らかさ」ととらえるその心情の「柔らかさ」が味わい深い。

ウインナーを床に落とし
世界滅亡を回避する朝

日夏屋キタ（埼玉県）

ウインナーはうっかり落としてしまったのだと思うのですが、その失敗に少々落ち込んでしまったからこそ、気持ちを切り替えようと、この小さなアクシデントによって「世界滅亡」が「回避」されたんだとやや強引に思い込んでみるという意識の流れがユーモラスで健気さも感じられて印象に残りました。

駅の鳩
たるんだ首の
間から
時々ちかりと
みどりが光る

たんころぶ（兵庫県）

なにげない光景の細部、ささやかな瞬間を見逃さない語り手のまなざしが、「時々ちかりと」光る「みどり」のようなものが、この世界にはちゃんとあることを気づかせてくれます。

古書店に秋光いちまいずつめくる

長谷川柊香（宮城県）

秋光の届く古書店にて古本をめくるとき、時間という光もめくっている。

初デートカタバミだよと
言えなくて一緒に探す幸福の形

蕪木（長崎県）

カタバミとクローバーは葉っぱの形が似ていますよね。生えているのはカタバミだから四つ葉のクローバーが見つかるはずもないことを語り手はわかっているけれど、探そうとする恋人に「言えなくて一緒に探す」。四つ葉が幸福を運んでくるのではない。この時間が幸福そのものです。

ポイントを細かく気にし
どうすれば
効率いいかで削るいのち

風船（東京都）

それほどには重大ではなく、人生の緊急時においてはどうしてもよくなるようなことでも結構人は気にしながら生きていて、それはおそらく自分で思っているよりも心を消耗させる。そのことに心の隅ではなんとなく気づいていたけれど、「削るいのち」に、ドキッとしました。日々の心の持ちようを考えさせられる詩です。

他にも多くの心動かされる作品がありました。

来月も楽しみにしています。